

第 27 回 愛媛形成外科研修会

抄 錄 集

日 時 平成 23 年 6 月 18 日 (土) 17 時 30 分～
場 所 独立行政法人国立病院機構 四国がんセンター
3 階 研修室
松山市南梅本町甲 160 TEL : 089-999-1111)
当番世話人 独立行政法人国立病院機構 四国がんセンター
形成外科 河村 進

第 27 回 愛媛形成外科研修会

研修会

1. 受付は当日 17 時 00 分より会場で行います。
※お車でお越しの方は、誠に申し訳ございませんが一律 100 円の駐車料金がかかります。
※会場前通路の改修に伴い、エレベーター降りて向かって左側通路は封鎖されております。右側通路より会場へお越しください。
2. 参加費は 2000 円を申し受けます。
3. 演者で、まだ研修会会員でない先生は、入会の手続きをお取り下さい。
4. 討論時間は、一題あたり 5 分を予定しております。
5. 発表形式は Windows Power Point 2003によるPCプレゼンテーションをお願いいたします。(当日はUSBメモリーあるいはPC本体を持参して下さい。)

連絡先

〒791-0280 愛媛県松山市南梅本町甲 160
独立行政法人国立病院機構 四国がんセンター 河村 進
E-mail: skawamur@shikoku-cc.go.jp
TEL: 089-999-1111

会歴

会期	世話人	会場	日時	参加者
第1回	河村 進 (四国がんセンター 形成外科)	松山成人病センター	平成10年7月4日	15名
第2回	小林 一夫 (愛媛県立中央病院 形成外科)	愛媛県医師会研修所	平成10年12月5日	17名
第3回	中岡 啓喜 (愛媛大学医学部皮膚科 形成外科診療班)	松山成人病センター	平成11年6月19日	20名
第4回	河村 進 (四国がんセンター 形成外科)	四国がんセンター 会議室	平成11年11月27日	19名
第5回	小林 一夫 (愛媛県立中央病院 形成外科)	四国がんセンター 会議室	平成12年6月24日	17名
第6回	中岡 啓喜 (愛媛大学医学部皮膚科 形成外科診療班)	四国がんセンター 会議室	平成12年12月9日	20名
第7回	河村 進 (四国がんセンター 形成外科)	四国がんセンター 会議室	平成13年6月23日	23名
第8回	小林 一夫 (愛媛県立中央病院 形成外科)	四国がんセンター 会議室	平成13年12月8日	23名
第9回	中岡 啓喜 (愛媛大学医学部皮膚科 形成外科診療班)	四国がんセンター 会議室	平成14年6月8日	27名
第10回	河村 進 (四国がんセンター 形成外科)	四国がんセンター 会議室	平成14年12月14日	27名
第11回	小林 一夫 (愛媛県立中央病院 形成外科)	四国がんセンター 会議室	平成15年6月28日	25名
第12回	中岡 啓喜 (愛媛大学医学部皮膚科 形成外科診療班)	四国がんセンター 会議室	平成15年12月13日	25名
第13回	河村 進 (四国がんセンター 形成外科)	四国がんセンター 会議室	平成16年6月26日	26名
第14回	小林 一夫 (愛媛県立中央病院 形成外科)	四国がんセンター 会議室	平成16年12月4日	29名
第15回	中岡 啓喜 (愛媛大学医学部皮膚科 形成外科診療班)	四国がんセンター 会議室	平成17年6月18日	31名
第16回	河村 進 (四国がんセンター 形成外科)	四国がんセンター 会議室	平成17年12月10日	35名
第17回	小林 一夫 (愛媛県立中央病院 形成外科)	四国がんセンター 研修室	平成18年6月24日	31名
第18回	中岡 啓喜 (愛媛大学医学部皮膚科 形成外科診療班)	四国がんセンター 研修室	平成18年12月9日	26名
第19回	河村 進 (四国がんセンター 形成外科)	四国がんセンター 研修室	平成19年6月16日	37名
第20回	小林 一夫 (愛媛県立中央病院 形成外科)	四国がんセンター 研修室	平成19年12月15日	30名
第21回	中岡 啓喜 (愛媛大学医学部皮膚科 形成外科診療班)	四国がんセンター 研修室	平成20年6月14日	30名
第22回	庄野 佳孝 (松山赤十字病院 形成外科)	四国がんセンター 研修室	平成20年12月6日	30名
第23回	河村 進 (四国がんセンター 形成外科)	四国がんセンター 研修室	平成21年6月27日	32名
第24回	小林 一夫 (愛媛県立中央病院 形成外科)	四国がんセンター 研修室	平成21年12月12日	28名
第25回	中岡 啓喜 (愛媛大学医学部皮膚科 形成外科診療班)	四国がんセンター 研修室	平成22年6月19日	34名

第26回	田中 伸二 (石川病院 形成外科)	四国がんセンター 研修室	平成22年12月11日	30名
第27回	河村 進 (四国がんセンター 形成外科)	四国がんセンター 研修室	平成23年6月18日	名

独立行政法人 国立病院機構 四国がんセンター

愛媛県松山市南梅本町甲 160
(TEL: 089-999-1111)

最寄り駅：伊予鉄横河原線 梅本駅下車 徒歩 5 分
伊予鉄横河原線 牛渕団地前駅下車 徒歩 6 分



プログラム

Section 1 (17:30～18:10)

座長：宮本形成外科 青木 恵美

1. Klippel-Trenaunay-Weber 症候群の 2 症例（症例検討）

愛媛県立中央病院 形成外科 德永 和代

2. 難治性下腿潰瘍の 1 例

愛媛大学医学部附属病院 皮膚科形成外科診療班 森 秀樹

3. 皮弁形成術後に生じた皮下ポケットに対するエタノール硬化療法

愛媛県立中央病院 形成外科 尾崎 純美

4. 仙尾骨部先天性皮膚洞の 1 例

愛媛労災病院 形成外科 加藤 嘉秀

Section 2 (18:10～18:40)

座長：愛媛県立中央病院 形成外科 尾崎 純美

5. V.A.C. ATS®治療システムと手術を併用した胸骨骨髓炎の 2 例

愛媛県立中央病院 形成外科 石野 憲太郎

6. 剥削術 19 年後に植皮術を行った先天性巨大色素性母斑の 1 例

愛媛大学医学部附属病院 皮膚科形成外科診療班 戸澤 麻美

7. エピテーゼによる乳輪乳頭再建

四国がんセンター 形成外科 藤田 悟志

Section 1 (17:30~18:10)

座長：宮本形成外科 青木 恵美先生

1. Klippel-Trenaunay-Weber 症候群の 2 症例（症例検討）

愛媛県立中央病院 形成外科

○徳永和代 小林一夫 中川浩志 尾崎絵美 石野憲太郎

Klippel-Trenaunay-Weber 症候群は、皮膚の血管腫、静脈瘤（静脈怒張）、患肢の片側肥大を 3 主徴とするが、リンパ管異常などに伴い浮腫や潰瘍形成が予測される。症例 1 は 6 歳女児で、病変は右半身に認められ、右膝と足関節部に疼痛を伴う腫瘍（静脈石）を認め 5 歳時に可及的に切除を行った。症例 2 は 1 歳女児で、右側腹部から右下肢の皮下に高度な血管奇形を認め、硬化療法が必要と考えている。今後の治療方針に関し、ご意見を伺いたく報告する。

2. 難治性下腿潰瘍の 1 例

愛媛大学医学部附属病院 皮膚科形成外科診療班

○森 秀樹 中岡啓喜 戸澤麻美

63 歳男性。平成 21 年 4 月左脛骨・腓骨の開放骨折を受傷し近医で治療を受けたが、難治性潰瘍を形成した。2 回のデブリードマンと VAC システムによる保存的治療後に後脛骨動脈穿通枝皮弁を用いて再建を行った。

3. 皮弁形成術後に生じた皮下ポケットに対するエタノール硬化療法

愛媛県立中央病院 形成外科

○尾崎絵美 小林一夫 中川浩志 徳永和代 石野憲太郎

エタノール硬化療法は頭頸部囊胞性疾患に対する硬化療法を応用したものであり、組織の犠牲が少なく低侵襲である。近年、皮下ポケットを有する褥瘡に対してもエタノール硬化療法が施行され、その有用性が報告されている。今回我々は皮弁形成術後に皮下ポケットを生じた3例に対し、エタノール硬化療法を行い良好な結果を得たので報告する。

4. 仙尾骨部先天性皮膚洞の1例

愛媛労災病院 形成外科

○加藤嘉秀 黒住 望 小暮倫久

12歳女児。出生時より仙尾骨部に皮膚洞を認めていたが、特に症状がないため様子をみていた。瘻孔が臀部にあることを本人が気にしているため、今回切除・摘出を行った。若干の文献的考察を加えて報告する。

Section 2 (18:10～18:40)

座長：愛媛県立中央病院 形成外科 尾崎 絵美先生

5. V.A.C. ATS®治療システムと手術を併用した胸骨骨髓炎の2例

愛媛県立中央病院 形成外科

○石野憲太郎 小林一夫 中川浩志 徳永和代 尾崎絵美

糖尿病患者の心臓手術後の胸骨骨髓炎は、一期的な手術では再燃を繰り返し治療に難渋することがある。最近当科ではV.A.C. ATS®治療システムと手術を併用することにより良好な結果を得ている。2症例を報告する。

症例1) 59歳男性。胸骨骨髓炎に対して一期的なデブリードマンと筋皮弁術を行ったが再燃を繰り返した。そのため骨・軟骨の広範囲なデブリードマンを行い、V.A.C. ATS®治療システムで肉芽増生後に皮弁形成を行った。

症例2) 62歳女性。透析中。症例1と同じくデブリードマンとV.A.C.療法、皮弁形成を行った。

6. 剥削術19年後に植皮術を行った先天性巨大色素性母斑の1例

愛媛大学医学部附属病院 皮膚科形成外科診療班

○戸澤麻美 中岡啓喜 森 秀樹

19歳男性。出生時より腹部から鼠径部にかけて黒褐色斑がみられた。先天性巨大色素性母斑の診断で、生後1ヶ月時に銛匙を用いた皮膚剥削術（1987年Mossら）と炭酸ガスレーザーで治療を行った。色素斑薄くなったが、完全消褪はしなかった。その後加療の希望なく経過観察を行っていた。今回治療の希望があり、脂肪組織で残存母斑切除し、分層植皮術を行った。剥削術後の病理組織を観察する機会を得たので報告する。

7. エピテーゼによる乳輪乳頭再建

四国がんセンター 形成外科

○藤田悟志 河村 進

乳房切除後乳房再建術の仕上げとしての乳輪乳頭の再建術には幾つかの手術法がある。しかしこの術式も満足のいく結果が得られるとは言い難い。今回我々はエピテーゼを用いた乳輪乳頭の再建を経験し、良好な結果を得たので報告する。